

## 辻井達一技術委員長、ラムサール湿地保全賞受賞者に決定!

2012年のラムサール湿地保全賞(科学部門)の受賞者に、KIWC技術委員長の辻井達一さんが決定しました。この賞は、ラムサール条約事務局から湿地の保全とワイズユースに貢献した個人・組織へ贈られるものです。辻井委員長は長年、日本の湿地保全において主導的な役割を果たすだけでなく、海外の多数の湿地を訪れ、地域の人々と共に調査や保全活動に積極的に取り組んできました。

授賞式は2012年7月にルーマニアで開催される第11回ラムサール条約締約国会議で行われます。



## アジア湿地シンポジウム(中国)への参加

2011年10月11日から13日まで中国の無錫市で開催されたアジア湿地シンポジウム(中国国家林業局、江蘇省人民政府、ウェットランドインターナショナル、ラムサールセンター主催)へ、KIWC技術委員会主任技術委員の新庄久志さんを派遣しました。

新庄さんは植物生態学の専門家で、釧路湿原のハンノキの成長について長年研究を続けており、第4期(2008~2010年)の釧路湿原自然再生協議会の会長も務めています。シンポジウムの「湿地と森林」をテーマとする分科会で、近年釧路湿原で大きな問題となっているハンノキ林の急激な拡大について説明し、その原因と考えられている湿原周辺域からの土砂流入を防止し、本来の湿原植生を復元するための取り組みについて紹介しました。

シンポジウムには、これまでKIWCが実施したJICA研修や国連訓練調査研修所(UNITAR)研修、国際会議などの参加者のほか、オーストラリアの姉妹湿地関係者も出席しており、互いに再会を喜ぶとともに、湿地の保全と利用に関する最新情報を交換しました。



## ラムサール条約40周年記念シンポジウム(那覇市)への参加

国内のラムサール湿地を持つ市町村でつくる「ラムサール条約登録湿地関係市町村会議」が、2011年10月18日(火)、19日(水)に沖縄県那覇市で開かれました。また10月17日(月)には会議に先立ち、ラムサール条約40周年を記念する公開シンポジウムが開催されました。

「自然と人々と地域の元気回復をめざす」と銘打たれたこのシンポジウムには、会議の会員市町村のほか地元のNGOや一般市民も参加し、加賀市長や高島市長をはじめ、地元那覇で活動する市民グループからの事例報告やパネルディスカッションが行われました。

KIWCからは菊地事務局長が参加し、湿地のワイズユースとエコツーリズムについて釧路の事例に触れ、これらの活動を地域活性化や海外諸国との連携へ発展させる取り組みについて紹介しました。



## 日本のラムサール条約登録湿地 シリーズ20 ~蕪栗沼とその周辺水田、化女沼(宮城県)

蕪栗沼・周辺水田、化女沼は宮城県の北部に位置する大崎市の東部と北部に位置し、2つの湿地は約10km圏内にあり、ともにガン類の国内有数の飛来地となっています。

蕪栗沼は北上川の後背湿地として形成され、周囲を広大な水田に囲まれており、海拔5mと低く、遊水地としての役割を担っています。沼の面積は150haほどですが、ガンの餌場にもなっている周辺の水田とあわせて423haが平成17年にラムサール条約に登録されています。マガンは多いときで10万羽、オオヒシクイは1500羽を超える飛来が確認されています。また、水位が下がると干潟状になり、シギやチドリ、の渡り中継地としても重要な役割を果たしています。

課題として陸地化やマガンの分散、水質の改善などがあり、学識経験者、NPO、国、県、近隣自治体が連携し、蕪栗沼の保全活用を進めてきました。現在、生物多様性保全推進支援事業の一環として、支障木の伐採、旧河道の復元、動植物、水質等のモニタリング調査を行っています。

一方、化女沼は北部を丘陵地に抱かれ、下流部の水田の灌漑用溜池として維持されてきましたが、平成7年に洪水調節と農業用水目的にダムとなっています。幹線道路からのアクセスに優れ、市民公園が整備されるなど、市民に親しまれてきました。周囲をクリ・コナラの里山林、ヤナギ・ハンノキの水辺林、ヨシ原、湿地がコンパクトかつモザイク状に位置し、多くの生き物を支えています。また、ガン類の中でも、特に亜種ヒシクイの越冬地となっており、平成20年に湖面部分の34haがラムサール条約に登録されています。

化女沼の北東約10km離れた場所には、同じくガン類有数の飛来地で、ラムサール条約湿地である伊豆沼・内沼があり、この3つの湿地の中で特に交通の利便性に優れており、3湿地でラムサールトライアングルを形成し、ツーリズム・交流の玄関口、情報発信拠点としての役割を目指しています。

(文と写真 大崎市産業経済部産業政策課)



蕪栗沼とその周辺水田 ガン類の飛び立ち



化女沼 夏はハスなどの水草に覆われる



# KIWC newsletter

## CONTENTS

技術委員会の活動	1	技術委員長のラムサール湿地保全賞受賞	4
世界湿地の日記念「冬のエコツアー」	1	湿地関連シンポジウムへの参加	4
市民環境調査「みんなで調べる復元河川的环境」	2	日本のラムサール条約登録湿地	4
国際協力機構(JICA)関連事業	3		

釧路国際ウェットランドセンター(KIWC)は、自然に恵まれた北海道・釧路地方を拠点に、地域の充実した施設・豊かな人的資源を活用する地域ネットワークです。地元根ざした、湿地保全のための普及啓発と国際協力活動を積極的にすすめています。

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、釧路地方にも津波が押し寄せ、港湾・漁業施設や沿岸の商店、住宅などが大きな被害を受けました。釧路地方は幸いにも人的被害はありませんでしたが、被災地で亡くなられた方や被災された皆様に、心からお見舞い申し上げます。またKIWCでは、オーストラリアの姉妹湿地をはじめ、国内外の湿地保護関係者や過去の研修参加者など、たくさんの団体・個人より温かいメッセージをいただきました。この場をかりてあらためてお礼申し上げます。

## 2011年度の活動から

### 技術委員会による現地検討会 in 阿寒湖

KIWC技術委員会では、2010~2012年度調査研究テーマ「生物多様性の観点からみた住民参加による水環境の修復」にかかわる事例研究として、2011年8月19日(金)に阿寒湖畔のマリモ群生地を訪れ、現地検討会を開催しました。当日は生物多様性の保全に携わる釧路地域の専門家など15名が参加し、普段は一般の立ち入りが制限されているチュウルイ湾で、マリモ群生地の視察を行いました。

マリモは糸状の緑藻の仲間で、普通は水底の岩に付着したり、そこからはがれ、綿くず状になって水中を漂ったりしながら成長します。阿寒湖では世界で唯一、大型の球状に集合したマリモが見られ、国の特別天然記念物に指定されています。現地を案内した技術委員の若菜勇・釧路市教育委員会マリモ研究室学芸員から、球状のマリモができるためには、湖底の地形や風波の発生、ミネラルの供給(阿寒湖の場合は温泉成分を含む湧水)などの欠かせない条件があり、阿寒湖のごく限られた地点がその条件を奇跡的に満たしていることや、そのためマリモ群生地を守るには、阿寒湖に注ぐ河川、湧水を含めた集水域全体の保全が重要などの説明がありました。

検討会では湖水に沈むマリモや周辺の自然環境のほか、阿寒湖畔エコミュージアムセンター内のマリモ研究室で行われているマリモの生育実験の様子などを視察後、阿寒湖の環境と生物多様性保全の課題について、意見交換を行いました。技術委員会では今回検討会を行った阿寒湖での事例を含む、釧路地域の水環境保全の取り組みに関する報告書を2012年度末に発行する予定です。



箱メガネで覗いたマリモ群生地の様子

### 世界湿地の日記念「冬のエコツアー2012」

ラムサール条約事務局が定める2月2日の「世界湿地の日」を記念し、2012年1月28日(土)に「冬のエコツアー2012」を実施しました。小学生から80代までの幅広い世代の地域の人々が参加し、スタッフを含む25名がシラルトロ湖を訪れました。

一行は釧路駅から冬季限定運行のSL列車「冬の湿原号」に乗り、車窓からエゾシカやタンチョウなどの野生動物や、雪でおおわれた釧路湿原の景色を楽しみながら、約1時間で釧路湿原東側にある茅沼駅に到着しました。

下車後は、KIWC主任技術委員の新庄久志さん(環境ファシリテーター)の案内で、シラルトロ湖周辺の林の中や凍った湖面を散策し、足跡や食痕などの野生動物の痕跡や、氷の様子などを観察しました。白く凍った湖の上では、全員が氷の上に寝転んで広々とした空を眺めながら、鳥の声や風の気配を感じてみたりしました。

散策の後には、地元で有名な温泉施設「憩の家かや沼」に立ち寄り、冷えた体を温めました。2012年の世界湿地の日のテーマ「湿地と観光」にあわせ、冬の釧路湿原を楽しむプログラムを企画しましたが、ツアー終了時のアンケートでは、参加者から「この自然をいつまでも残したい」「湿原を守るボランティアなどにも参加したい」などの感想も寄せられました。湿原の自然の素晴らしさに触れ、楽しむことが、保全への関心と意欲に繋がる大きな一歩になると実感した一日でした。





## ラムサール条約 40周年記念事業

## 市民による環境調査 みんなで調べる復元河川的环境・2011 (平成23年度河川整備基金助成事業)

釧路湿原の茅沼地区を流れる釧路川は、1980年代に治水と農地開発のため河道が直線化されました。その後、この地域の国立公園化や、河川の直線化による土砂流入が一因とみられる釧路湿原の乾燥化などの問題をうけ、釧路湿原自然再生事業の一環として、2010年に直線河道のうち1.6kmが、蛇行する2.4kmの旧河道に戻されました。

KIWCでは地域の皆さんに、釧路湿原への興味を高め、自然再生事業への理解を深めてもらうため、約30年ぶりに蛇行が復活したこの旧河道の周辺地域を対象に、住民参加の環境調査を継続して行っています。

2011年度は(財)河川環境管理財団より河川整備基金の助成を受け、夏・秋2回の調査を行い、通水再開後1年を迎えた蛇行復元河川とその周辺域の環境の変化を調べ、自然再生事業により期待される効果について地域の皆さんと一緒に考えました。



埋め戻された直線河道(点線)と復元された蛇行河道(矢印)。写真は釧路開発建設部提供。

### 第1回調査(夏調査)

2011年7月2日(土)、茅沼地区の釧路川蛇行復元区間周辺で環境調査を実施しました。2010年の8月から今回で3回目となるモニタリング調査で、小中学生を含む市民28名が参加しました。

参加者は水生生物調査班、土壌調査班、植生調査班の3班に分かれて、埋め戻された直線河道と復元河道が合流する地点から前後1kmほどの区間で、水生生物や河畔の植生、土壌の構成などを調べました。各班にはKIWC技術委員会メンバーの新庄久志さん(土壌)、針生勤さん(魚類)、高嶋八千代さん(植物)、照井滋晴さん(水生生物)が調査のリーダーとして参加しました。

現地では、蛇行河道が復活してから1年間の間におきた氾濫の跡や砂の堆積、上流から運ばれてくる土砂の粒の大きさの変化などが確認できました。参加者からは「たった1年でも少しずつ川の様子が変わっていくのを実感した」、「(土砂流入防止など)蛇行復元の目的が初めて理解できた」などの感想が出されました。

### 第2回調査(秋調査)

この年度2回目の環境調査は2011年9月10日(土)に行われ、小、中、高校生から80歳代まで幅広い年代にわたる市民25名が参加しました。

参加者はカヌー3艇に分乗し、釧路川の蛇行復元河道下流部から元の直線河道との合流点を経て、湿原中心部を流れる自然河道に至る5.5kmを下りながら、水の流れや河岸の浸食・氾濫の様子、河畔の環境などを観察しました。また、途中で3か所の砂州(寄り州)に上陸し、KIWC主任技術委員の新庄久志さんの指導のもと、川水によって運ばれ河岸に堆積した土砂の構成などを調べました。

カヌー下船後は、湿原東側の塘路湖湖畔にある塘路湖エコミュージアムセンターで、調査の成果を確認・共有する「ふりかえり」を行い、調査で発見したことや感じたことを艇ごとに発表しました。参加者からは「復元河道で水が氾濫した跡を見つけた」「自然河道ではカーブの外側と内側で、河畔林の植生が違った」「砂州の上にタンチョウの足跡を見つけた」などの発見や、「湿原の中で広い空の下、とても気持ちよかった」などの声を聞くことができました。



復元河道をカヌーで下る



砂州の計測



植生調査



土砂調査



捕獲した水生動物



ふりかえりの様子

### JICA 「ラムサール条約・生物多様性条約に係る湿地の保全と利用」研修の実施

2011年6月6日(月)から7月19日(火)まで、JICA(国際協力機構)による集団研修「ラムサール条約・生物多様性条約に係る湿地の保全と利用」をKIWCが受託しました。

この研修は環境省の主管によるもので、湿地の保全と賢明な利用を進めるため、各研修員が自国で解決すべき課題を整理し、解決策となる具体的な事業案を企画・実施することを目標としています。最終年度の3年目となる2011年度は、3カ国(マレーシア、モンゴル、フィリピン)から湿地・生物多様性保護の行政担当者4名を受け入れました。

研修は、亜熱帯のサンゴ礁やマングローブ湿地から、亜寒帯の泥炭湿原までを網羅する日本の生物多様性の豊かさを活かし、沖縄、富士吉田、東京近郊、釧路地方の4地域で行われました。研修員は、環境省施設を中心とした普及啓発・研究施設の視察や、生物多様性保全の専門家や担当行政官による講義、各地で行われているエコツアーや環境教育プログラムへの参加体験などを通じ、国際条約の理念に基づく湿地の保全やその賢明な利用について、具体的な手法や課題を学びました。また、釧路地域での研修中にはホームビジットや学校訪問などの機会もあり、研修員は地域のさまざまな年代、立場の人々と交流を深めました。

最終日のレポート発表会では研修中に得たアイデアをいかし、子供や女性を対象とした環境教育プログラムや、学校での野鳥モニタリング調査など、帰国後の事業案を披露しました。



### JICA 2011年度エコツアー研修の実施

2011年8月29日(月)から10月4日(火)まで、JICAによる集団研修「自然・文化資源の持続可能な利用(エコツーリズム)」研修を、KIWCが受け入れ機関として実施しました。研修には7カ国(アルゼンチン、ケニア、スリランカ、タイ、ウガンダ、バヌアツ、ベトナム)から、自然公園の運営や観光振興に携わる国家・地方の中堅行政官7名が参加しました。

「エコツーリズム」は、訪れる土地の自然や社会に配慮しつつ、その自然や文化を楽しむ旅行スタイルのひとつです。住民がツアーの運営に参加し、地域の自然や文化を、直接利益を得られる観光資源として持続的に活用できることから、地域開発の手法として近年、特に途上国で注目されています。

研修員は東北北海道の豊かな自然の中で、漁業や酪農などの既存産業を活用したツアーや環境教育、環境モニタリングの実習、視察などに参加したほか、東京・京都の史跡や里山を題材に、日本の伝統的な文化や自然とのかかわり方に着目したエコツアーの事例にも触れ、研修期間の約1か月半、エコツーリズムについて多面的に学習しました。

また、釧路のボランティア団体の協力によるホームビジットや交流会、小学生との環境教育プログラム体験、エコツーリズムを学ぶ大学生とのワークショップなど、研修中はいろいろな場面で、多くの日本人と交流し、親交を深めることができました。自然環境や文化の異なる国から集まった研修員達はみな、自国の状況や取り組みについて積極的に情報交換し、日本での体験を楽しみながら研修を修了することができました。



### JICA ブラジル・ジャラポン地域CP研修プログラムの受け入れ

JICAが2011年6月20日(月)から6月23日(木)まで釧路地域で実施したブラジル環境省職員対象の研修で、KIWCが6月21日(火)、22日(水)の2日間、研修指導を担当しました。

この研修は、ブラジルにおける亜熱帯サバンナの生物多様性を保全するため、JICAがジャラポン地域で技術協力を行っている「生態系コリドープロジェクト」の一環として実施されたものです。今回は、このプロジェクトのカウンターパートを務めるシコメンデス生物多様性保全院の職員3名が参加しました。

KIWCでは、釧路湿原保全のためのネットワーク構築に関する講義を行い、環境教育プログラム実習、自然情報施設の視察などを通じ、官民連携による湿地保全の取り組みや、ワイズユースの事例、普及啓発の手法を研修員に紹介しました。



### JICA イラン・アンザリ湿原環境管理プロジェクトカウンターパート研修の受け入れ

2011年9月6日(火)から15日(木)まで、イランの環境庁職員を対象としたJICAの研修が東京、宮城と釧路地域で行われました。この研修は、JICAがイランのアンザリ湿原の保全のため、現地で進めている協力プロジェクトの一環で、イラン環境庁の職員5名が参加しました。

KIWCでは期間中、9月12日(月)、13日(火)の2日間、研修を受け入れ、釧路湿原の保全の概要と、環境教育の取り組みに関する講義や、カヌーを用いた自然再生事業地の視察などを行いました。

イランのカスピ海南岸に位置するアンザリ湿原は、湖沼・河川や湿原が広がる、世界有数の水鳥越冬・繁殖地として知られています。イランで最も古いラムサール条約登録湿地のひとつですが(1975年登録)、近年は都市生活や農業に伴い、排水や土砂が流入するなど、水質の悪化が進み、1993年に同条約のモントルーレコードに登録されました。

水辺環境の改善や、多種多様な動植物が息づく貴重な生態系を守るため、イラン政府の要請を受け、日本政府はJICAを通じて、2003年からアンザリ湿原の保全プランを策定するための技術協力を行ってきました。釧路での研修中には、このプロジェクトをきっかけに生まれた日本とイランとの湿地保全にかかわる交流を、今後どのように発展させていくか、研修員達とKIWC事務局メンバーとで話し合う機会も設けられました。



アンザリ湿原(セルケ野生生物保護区)